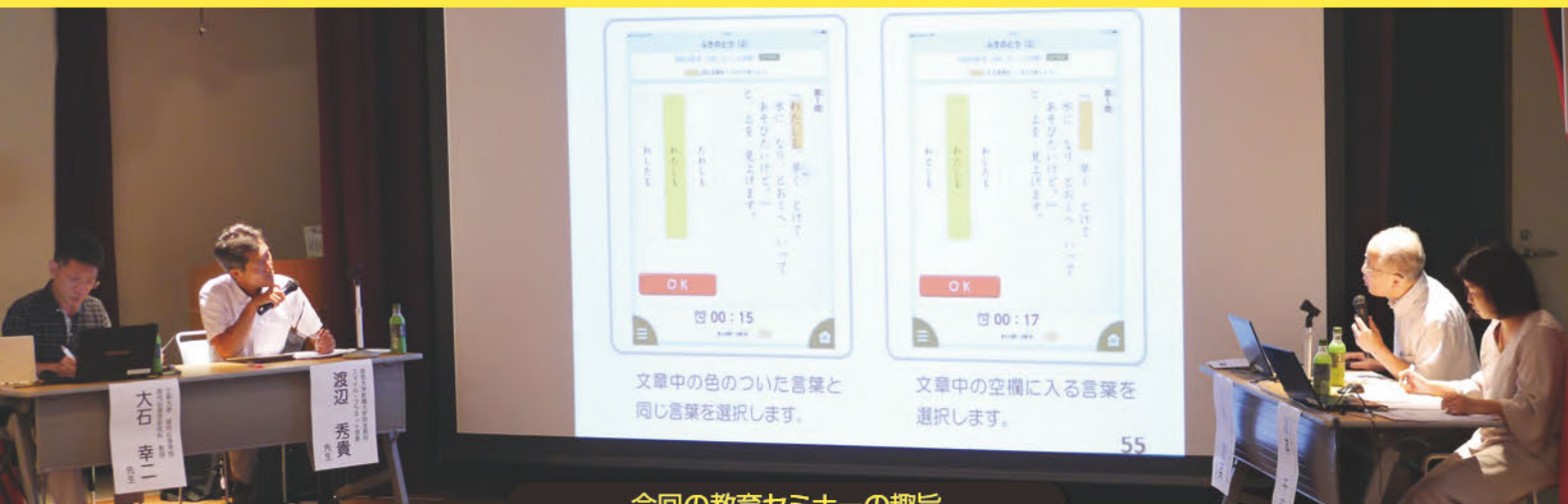




教育セミナーレポート

“ - Theme - ”

通常学級で 発達障害傾向のある子どもたちへの 具体的な対応を考える!



今回の教育セミナーの趣旨

発達障害あるいはその傾向がある児童への教育支援体制は大きく変わってきていますし、学校が抱える課題も多様化・複雑化しています。今回は、「学校組織としてこの課題についてどう考えていくべきか」に焦点を絞り、第一部では、行政、小学校現場の管理職、特別支援教育コーディネーター、特別支援教室巡回拠点校の先生などに話を伺いました。第二部では、児童の読み書きの困難への対応や行動分析、教育サポートなどご専門の方々から知見を伺いました。



【全体司会・コーディネーター】
渡辺 秀貴
創価大学教職大学院准教授
NPO法人スマイル・プラネット理事

第一部：小学校現場レポート (東京都) 第二部：専門家の助言



国立市教育委員会
教育指導支援課長
三浦 利信



昭島市立つつじが丘
小学校 校長
上田 祥市



多摩市立東落合
小学校 主幹兼教諭
竹川 優子
●特別支援教育
コーディネーター



あきる野市立多西小学校
主幹教諭
中村 敏秀
●特別支援教室巡回
拠点校主任



東京学芸大学
教授
小池 敏英
●発達障害分野
(読み書き困難支援)



立教大学
教授
大石 幸二
●教育心理・
行動分析

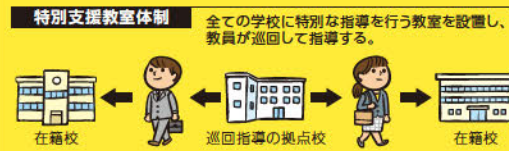
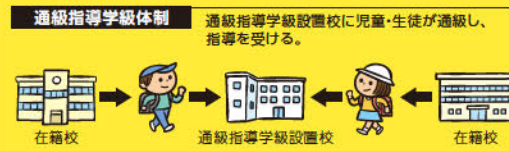


一般社団法人
kidsサポートデザイン理事
坂本 千奈
●臨床心理士
●地域学校教育サポート

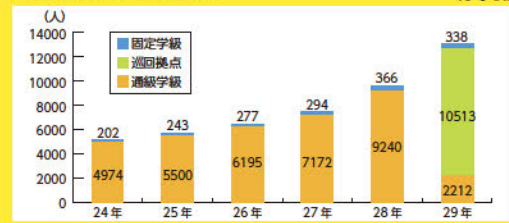
第一部：小学校現場レポート(東京都)

小学校現場の実態・現状

■特別支援教室体制の変化(東京都の事例)



■在籍児童数の推移 (小学校)



【竹川】 いちばん課題だと感じるのは、支援のために配置されている多くの人をコーディネートする人材がいないことです。また、配置された方たちが正規職員以外であるため、会議に出席していないことも多く、支援策や情報が共有されにくいといった問題もあります。目の前にいる子どもに対峙する方たちになかなか情報が伝わりにくい、支援のスタンスが一致させにくいです。それから、質の問題。スクールカウンセラーは学校の中で心理をやっていくという特殊さがあり、人によって様々違うという中で、質を上げていくことが課題だと思います。校内委員会については、協議事項の増加により、情報共有の時間が取りきれない現状もあります。そして校内委員会や特別支援委員会に求められている専門性をどう高めていくのかも難しい。また、学校間や学校内での考え方の差が非常に大きいと思います。

最後に、校内委員会で、本来は情報共有して、いろんな議論をしたいところですが、対応がうまくいかないと、その原因として子どもの特性ばかりが挙げられ、相談機関や医療につなげることで解決してしまい、教員側の関わり方や集団への対応について議論するには至らないことが多くあります。本当に入りたいところにメスが入らないところが難しいと感じています。

【三浦】 支援を充実させるためのキーワードと考えていることは3つです。1つ目は、管理職のリーダーシップ。特別支援教育を学校の経営方針の1つとするのではなく、学力向上や生活指導、体力向上などの中に特別支援教育はどう関わっているのかという方針を示さないと実現していかないと。2つ目は、支援の中心である学級担任が特別支援教室を見に行くことが大事だということ。最後に、学級担任を支える職員室の雰囲気作りです。子どもたちと接して、何か気づきや困り感があっても、担任が抱えてしまえば進まないですし、担任の先生も苦しいです。担任の先生が苦しめば、実際に目の前にいる子どもたちも支援が届かなくて苦しむことになりますから、担任の先生が、困っていることを職員室で伝えられるような雰囲気作りをすることが大事です。

【三浦】 従来、通級指導学級では、在籍している学校から通級する学校へ、子どもたちが動いていましたが、今年度から、全小学校に特別支援教室が設置され、先生方が動く形に変わりました。東京都のキャッチフレーズは「子どもが動くから大人が動くへ」です。子どもたちは、自分が在籍している学校に設置された特別支援教室で、巡回指導教員の先生から必要な支援が受けられるように変わりました。これにより、在籍学級との連携が密になることが期待されています。

また、東京都では、特別支援教室専門員と呼ばれる非常勤職員を、一校につき一人配置しています。この方は、校内外の連絡調整、教材の作成や記録、それから特別支援学級で支援を受けている子どもの在籍学級での様子を授業参観で確認して、巡回指導教員と支援のあり方を検討する仕組みを作るための専門員です。ただ一校に一人なので、対象児童が増え、在籍学級の授業観察はできなくなってしまうことが課題です。また市費等で、特別支援指導員という通常の教室を支援する指導員が入っているところもありますので、この指導員も絡めながら、実際に特別支援教室の支援を受けている子どもが、受けた支援を在籍学級でどう生かせるのかに取り組んでいるところです。

【上田】 この変化の最大のメリットは、先生たちが動くことによって、送り迎えがなくて通えなかった児童が通いやすくなったことだと思います。ただ在籍児童数が増えるために教員が不足してきます。実際に配置されている先生は、新規採用の先生や初めて特別支援教育に関わる先生も多くなっています。そういった先生方が専門的な知識を身につけていくための仕組みづくりが課題だと思います。

【中村】 特別支援教室への変化の中で、垣根が低くなった部分と、低くなったからこそ生じる課題があると考えます。発達障害のある子どもたちの中でも「読み書き」と、「社会性への対応」の問題が混在していることが多いので、その辺は丁寧に扱う必要があると感じています。

課題として捉えていること

特別支援教育をめぐる現場の課題点

- 特別支援教室導入等に伴い人的配置が進んでいるが、増えた支援者をトータルでコーディネートする人材の不足
- 専門員、心理士、スクールカウンセラー等の質の問題
- 校内委員会における協議事項の増加
- 校内委員会や特別支援教育コーディネーターに求められる専門性
- 学校間、学校内での教員の温度差
- 本当の意味での支援策協議が行いにくい現状 (子供の特性のせいにして解決)

特別支援教室での支援を充実させるために



【上田】 教育研究家の妹尾昌俊さんにも言われていますが、学校が組織的に力を高めていくには3つの要素が必要だと思います。

1つ目は目標の共有。校長がやりたい学校像や目標を明確にし、職員が同じ方向を目指して日々の仕事を進めていけるように提示しているからです。

2つ目が、プロセスの設計。共有した目標のために、具体的に一人ひとりの職員が何をすればいいのかということです。そのためには実態把握をしておくはいいかもしれません。小学校は学級担任制なので、学級担任の視点からというのがいちばん大きいかもしれませんが、そこが弊害でもある。専科や養護、コーディネーターの先生たちが様々な場面で見て、どう子どもたちの実態を取り上げるのが重要で、実態を把握した上で、一人ひとりが自立と共生に向かって何をすべきなのか考えていく必要があると思います。

最後に、学びの継続性と再現性です。特別支援教室で学んだことが、生かされて再現されないと、そして継続されないと。そのためには、在籍学級の先生たちが、どんなことを特別支援教室で学んだのか知っていなければならない。ここをどうコーディネートするのが重要で、学校として特別支援教育が理解されるためには、共生社会というものをどうイメージしやすくするかが大きいと思っています。

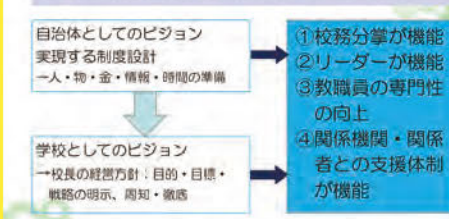
【竹川】 困っていても閉ざしてしまう先生たちにどのように対応していくかは、校長がどのような方針で学校経営をされているかによるところが大きいと思います。学校として向かっている方向が明確であることが必要ですが、意外とそこがややふやです。これまでの価値観を変えて、多角的に学級を見ていく、担任のところに来ない子どもでも、いろんな先生とつながりながらその子をいろんな側面から見ていくというのが、これから大事な部分ですが、最初は難しいと感じるところです。そこで方針がすく生きてくる。方針がしっかり出されている中でないと、推進できない部分があると思います。

これから大切にしたいこと

通常学級における これからの特別支援教育で大切にしたいこと

- 全体対応の中に個別対応がある。
- QUでは、支援が必要な子供の50%以上が不満足群に在る。満足率は16% (東京福祉大学准教授 深沢和雄)
- 子供の特性のみに解決を求めず、集団の中での課題、指導方法の課題として対応を考える。
- 形骸化しない個別指導計画。
- 支援の接続を意識した校内組織。
- 正規職員以外の人材の育成と連携。

学校の教育支援力の向上に欠かせない事例の関係性



校長のリーダーシップについて

学校経営の視点

- 1 学校としてのビジョンを示す
『自立と共生』・経営方針に基づく児童理解
- 2 客観的な実態把握から具体的な効果的な手立てを考える(組織で動く)
個々の児童理解は全職員の間から
4人のコーディネーターを中心とする校内委員会
- 3 学びの継続性と再現性を考える
特別支援教室での学びを活かすための在籍学級や家庭との連携
- 4 特別支援教育の理解と専門性の向上
児童に・・・全校総会で理解授業
各学年ごとの理解授業
保護者に・・・保護者会での理解研修
専門家の講師による学習会
教員に・・・校内研修2回(専門家・そよかぜ教員)
通常学級教員のST経験研修年2回
- 5 特別支援教室巡回指導員の資質の向上
無らずつ一つ学ばせる・・・児童の何をどうとらえるのか、何のためにやるのかを明確にすること
(学習指導要領に根拠をもつ)

【竹川】 特別支援教室の研修をやっても、それが集団作りや学級経営との結びつきにまではまだ落ちていない。日々の経営にどう落とし込んでいくのがこれから必要だと思います。あくまでも全体指導で1つの大きな動きが成立している中で、個の対応を行っていくことが大切です。個対応ばかりに走ってしまうと集団が崩れてきてしまう。そういった「集団づくり」の中での個対応を学ぶ場があまりないのが現状です。「特別支援教育」と単独で研修をするのではなく、「集団づくり」と併せた研修を、行政が提供していく必要があると思います。

後は、担任の先生がこうしていきたいという機会・場を行政や学校が提供する必要があると思います。担任の先生の志があつてこそ、私たち特別支援教育コーディネーターは初めて動くことができるので、先生たちから何とかしたいという気持ちを情報共有の場などを利用して、引き出す役割が私たちにはあると思います。

【中村】 特別支援教室の担任は、自分の教室が誰に何をすることでいいのかを理解し、そのことを保護者や在籍学級担任に対して説明できなければならないと思います。この点が相互に理解されていることはシステムが機能する上で非常に重要だと考えます。

そして、実際の指導にあたっては、支援対象の中心となる自閉症スペクトラムの子どもの独特な感覚を身近に実感し、それを代弁して伝えていくことが、非常に重要な役割の一つだと思います。

【渡辺】 各校の教育支援力を上げていくには、一つは、自治体としてのビジョンを設計して実現していくことがスタートだと思っています。そうしないと、最前線で頑張っている先生方が子どもと親と笑顔で接する関係性は生まれません。その後、校長としてのビジョンがあつて、そこに至るプロセスまで分かりやすく説明できる状態があり、それを教職員が理解して共有している、というような状態があつてこそ、校務分掌が機能し、教員の専門性も徐々に高まっていく、関係機関、関係者との支援体制が機能していくのだと思います。

第二部：専門家の助言（講師）

第一部では、行政、小学校現場の管理職、特別支援教育コーディネーター、特別支援教室の巡回拠点校の先生方から、望ましい組織のあり方や、担任の集団や個の関係について難しい問題がある点などをお話いただきました。第二部では3人の専門家の方々から、対象となる子どもたちのタイプ別に、少し具体的な手立てなどを中心にお話をいただきました。



特別支援教育浸透のいちばんの近道は？

【大石】 子どもたちのこだわりが強いとか話が聞けなくて集中力がないとかちょっとしたことでもイライラしてしまっているといったとき、1つ1つにこだわり過ぎて、個々の事象を解決しようとする、うまくいかないこともあります。

もしかしたらその背景には、その子どもの体の感覚が繊細すぎてそわそわした雰囲気をつくり出しているかもしれないので、体の様子を見てあげないといけないのです。でも学校の先生は、例えば子どもの足の裏が床に着いていないこと自体、あまり見ませんよね。ある子どもが気分の変調をきたしやすい場合、もしかしたらその子の中でのリズムとか、精神的なテンポをみんなに合わせて必死にやっているうち、もう精魂尽き果ててしまい、情緒面が揺れ動いているのかもしれないですね。その子がよもや過剰適応しているなんて思わないですよね。その子が無理をしていないかと慮ることが大切です。

ただ、一人の先生で見取るのは大変です。多面的にその子どもを見るために、例えば子どもの描画や筆跡の分析を職場の先生たちと共有しようとしたら、図工専科の先生の出番です。職場内のそれぞれの人の今（持つ力）が生かされるのです。先生方の今が生かせる学校の組織体制を作ることが特別支援教育を浸透させる上でいちばんの近道だと思っています。

現場研修のあり方の見直しを！

【大石】 子どもたちが姿勢の面で苦勞や辛さがないかという視点で見えられれば、机間指導しているときに気づいてあげられますが、なかなか子どもたちがどんな姿勢で過ごしているか自然には話題になりません。先生のレベルを一定以上にするには、全てのクラスで起こっている出来事をみんなが共有して、フィードバックしていけばいいのです。長時間外部に行って特別支援教育の研修を受けるより、こういった校内での現場研修の形に変えていくことが必要かもしれません。

学級担任と支援学校の先生の共通言語の創造を

【大石】 ASD（自閉症スペクトラム）やADHD（注意欠陥・多動性障害）の子どもたちは、抱えている苦勞を身をもって表現しています。その苦勞を、支援の専門家の先生はよく認識して支えてきた実績があります。それが通常学級の子どものたちにも活用されるには、初任者を含めた担任の先生方でもうまく活用していただけるための加工が必要です。ですので、支援学校の地域コーディネーターの先生や、通級・巡回を担当しているの方々には、こういった加工と共通言語の創造をやっていただきたいと思っています。

大石先生提示資料

教師や保護者の主訴

- こだわりが強い
耳を塞ぎ、偏食
拒否して、孤立
- 話がきけない
集中力がない
一緒にやらない
- 興奮しやすい
急に怒り出す
イライラする

子どもの様子を見取り

- 過敏で力が入るから
- 特異なやり方での対処
- 変動を抑えるふるまい



小池先生提示資料

ひらがなの読み困難

診断・治療のための実践ガイドライン(2010)が、使われている。単音リスト、有意義語リスト、無意味語リスト、単文リストの4種のリストの内、2種以上のリストで、音読が基準値（平均+2SD）を超える場合に、読み障害の候補とする。

◆ひらがなの読み困難者・・・①学習性無力感が強い。②多くの者は、高学年で、漢字単語の読み書き困難を示す。

■『読めた』『わかった』『できた』読み書きアセスメント
「読めた」「わかった」「できた」読み書きアセスメント

東京都教育委員会
http://www.kyoiku.metro.tokyo.jp/buka/shidou/tokubetsushien/tokushu-sck_shidou/yomikakiasessmento.pdf

27年・28年4月に都内の小・中学校に配布

- ひらがなの流ちょうな読みの低成績者は、漢字の読みの低成績を示す傾向が強い。
- 漢字の読みの低成績者は、漢字書字の低成績を示す傾向が強い。
- クラス全体の成績マップを見ると、低成績の組み合わせを示す児童とともに、リスクがあっても、漢字の読み書き低成績を示さない児童もいる。
⇒ 児童の努力を反映している可能性が大。



読み書き支援は、困難の背景要因を知ることから

【小池】 読み書き困難の背景が少しずつ整理されてきました。これは、ひらがなの単語や文の音読時間に基づいて、読み障害の程度が、評価できるようになってきたためです。漢字単語の読みについては、その言葉の意味を知っていると読めないというケースがあるので注意が必要です。特に、抽象的で視覚的イメージが乏しい漢字単語の読みが困難なことが知られています。

もう1つ、東京都では、「読めた・わかった・できた、読み書きアセスメント」を作り、各学校に配付しています。これを利用して、漢字の読み書き困難の背景要因を知ることができます。支援の内容は、読み書き障害に関係した要因か、学習環境に関係した要因かによって異なります。このアセスメントで学校での特別支援のアプローチを、具体的に支えていくことができます。子どもの得意・不得意な読み書きスキルが分かるので、その子どもにとって無理のない学習支援につなげることができます。先生方の有用な情報としてご活用いただけます。

漢字を書けるようになるには、読むことから！

【小池】 漢字の書きの困難のリスク要因として、漢字の読みの低成績が強く影響していることが分かってきました。要は、「読めない漢字は書けない」ということです。漢字を書くことが低成績な子どもは、読みの習得が不安定なために、書きに困難が生じているのです。ですので、やはり先生方が基礎・基本としている“文字を読む”というスキルがとても大事だということです。

特殊音節は、文字と音の規則性を知ることによって、たいていの子どもは学習が進みます。よく経験する特殊音節については習得していても、あまり経験しない特殊音節は未習得であるという子どももいます。また、ひらがなの特殊音節が苦手な子どもは、ローマ字の特殊音節表記の習得でも苦手を示します。ひらがなの流ちょうな読みが苦手であったり、特殊音節が低成績であったりすると、それはたいてい漢字の読み書きにも影響してきます。でもそれらのリスクがあっても漢字の読み書きの低成績を示さない子どももいます。それは、その子どもがとても努力している可能性が大きい場合です。努力している子どもに対しては、励ましの言葉をかけることがとても大切です。

アセスメントをしてクラスワイドの支援を！

【小池】 読み書きのスキルの把握ができると、クラスワイドの支援に繋がります。クラスの状態に応じてクラスワイドの支援をしていくことは、学習支援における1つの選択肢だと思います。アセスメントを行うことによって、そのクラスの特徴を知り、そしてクラスの状態によってはさらにクラスワイドに働きかけていくことができれば、日ごろの授業が進めやすくなります。



子どもの特性の理解のためにできること

【坂本】 よく、子どもたちの特性を理解して対応しようといわれますが、私たちは本当に特性というものを理解できているのでしょうか。これから簡単なエクササイズを通して皆さまに擬似体験していただきたいと思ひます。資料を丸めて望遠鏡を作り、片眼で見て会場内の赤いものを見ただけたくさん見つけてください。（会場スクリーンには、「これを見た人はそっと一瞬だけ手を挙げてください」と表示、会場の数人だけ挙手した状態になる。）

今回体験していただいたのは、ASD（自閉症スペクトラム）の特性の1つ、「木を見て森を見ず」という状態像に近い体験です。俯瞰してものを見るのが苦手な子どもは、何か欲しいものが目に入るとその周辺には意識を払えず猪突猛進……ということがあります。列に並べず横入りしてしまう子どももこのような特性をもっていることがあり、その場合「横入りはいけない」という指導より「列があるよ、並んでいるよ」といった気づかせる声かけが特性に合った対応といえるかもしれません。

また、落ち着かない子どもを前の席にするという画一的な対応をすると、視野が狭いのに巨大なスクリーン映画館のいちばん前で見ているような感じで苦しくなってしまう、むしろ後ろの方で狭い視野を動かしながら黒板を眺められる方がよかったです。

気になる子どもに関しては、先生方の普段の対応の中で、うまくいったこと・うまくいかなかったことを振り返り、整理することでその後の関わりのヒントが得られると思ひます。

坂本先生提示資料

配布資料を細く丸めて望遠鏡を作ります
その望遠鏡で会場内を見まわし、「赤いもの」をできるだけたくさん見つけてください

資料を筒状にして、会場の「赤いもの」を探す参加者

会場スクリーンには「これを見た人はそっと一瞬だけ手を挙げてください」と表示

▲会場のスクリーンに気づいた人だけ、挙手をするのだが、実際に挙手した人は数人のみ。視野が狭く、スクリーンには気づかない。

STEP① エピソード集め・記録（例）

どんな状況で	何が起ころ	誰がどのように対応したか	どうなったか	きまをいつたか
・休み時間、担任の周りに子どもたちが集まってきた時	・担任は声と話をささげながら子どもたちの話を聞いてあげた。	・担任が「いまみんな話してさからちょっと待ってね」とみんなに伝えた。	→それでもみんなが話し終ったので、みんなは立ち上がった。	😊
	・「仲良かったか」と話して、先生が話を聞いてあげた。	→みんなは待たされたが、みんなが話を聞いてあげた。	→みんなは待たされたが、みんなが話を聞いてあげた。	😊
	→みんなの周りに手を書き、先生が話を聞いてあげた。	→みんなは待たされたが、みんなが話を聞いてあげた。	→みんなは待たされたが、みんなが話を聞いてあげた。	😊

同僚との響き合いで「教師力」のアップを!

【大石】 先生方は新しい教育技術の開発に時代が動いている中で、授業や指導・支援の手法や進め方をバージョンアップしていかなければいけないと思ひます。そのためには、ベテランの先生方を含めて、先生方が変わることを恐れず、変容しようの勇気をもつことがとても大事で、変容するシステムの構築が必要なのです。そうすると同僚との響き合いの中で、確実に学校の力量は上がっていくはず。その前提として、「何か新しいことを学んだり実践してみたりしたら自分自身の高まりを感じた」という実感が必要なのだと思います。つまり、やってみたら自分は高まった子どもは変容したし、クラスの関係性はよくなった。そうなったときに初めて自ら動き出せるのだと思ひます。そのための機会の設定や、職場内での現場研修がすごくよい機会になると思ひます。



会話を通して子どもの読解力の支援を!

【小池】 読み書き困難の背景の1つに、読解の弱さがあることも指摘されています。読み書きがすらすらできても、話の要点を理解できないということです。そういう子どもは、例えば何かうまくいかなかったときに、どうしてうまくいかないのかを読み取ることが苦手です。ですから「読解」は、子どもたちが自分の状況を把握するのに大事な力です。読解力のアップに大切なことは、対話することです。人と対話してうまくいく経験がとても大事です。その最前線にいるのが、学校の先生方です。うまくしゃべれない子どもとは、うまく会話を繋げていくことがとても大事な支援になっていることを先生方にお伝えしたいと思ひます。



アセスメントの質の向上を!

【坂本】 担任の先生にできるアセスメントは3種類あると思ひます。授業の中でできるもの、休み時間にできるもの、他の人を頼った方がよいものです。休み時間とは、例えば机の周りやロッカー、着ている服などに少し意識を向けてみることです。他を頼った方がいい場合は、姿勢の崩れや体の揺れの具合、地に足が着いているかなど、一斉授業をしていると、気がつかずたり目が向きにくかったりする部分です。そういったところは他の人に頼って、それをどんどんシェアしていくという仕組みづくりができると、アセスメントの質が総合的に上がっていくと思ひます。



読み改善におススメのデジタルアプリ



【小池】 読むということ自体を習得途上の幼児や小学校1年生の子どもには、LD（学習障害）でなくても音読に時間がかかる子どもがいます。読む経験の中で回路網が形成されていくので、単語や文章を読むのではなく、単語を瞬時に読み取るトレーニングをしてあげることがとても大事なのです。そのトレーニングは、教科書の題材でやってあげるのがいちばんいいですね。授業で出てくる文章、明日授業でやる文章の単語のトレーニングをやるのが大事じゃないかということです。

その目的で開発されたのが「読書力サポートアプリ」です。これは教科書教材を題材に課題をやっていくアプリなのですが、これで練習した後に、再度音読をさせると、子ども自身（本人）が改善の様子分かるくらいに変化していきます。なので、自信をつけて授業に臨めるようになるというわけです。

読書力サポートアプリ

iPadで App Storeを開いて、検索で「読書力」と入力 → 「読書力サポートアプリ」を見つける

ダウンロードし、新規アカウント登録

小池先生提示資料

【読書力サポートアプリの機能】

- ▶ 教科書教材の朗読が聞ける。
- ▶ 自分の音読を録音して確認できる。
- ▶ 教科書に出てくる言葉の読みのドリルができる。
 - ・レベル別（3段階）で課題が用意されている。
 - ・ひらがな単語、特殊音節単語、漢字単語。
- ▶ 作品の読み取り問題も用意されている。

*iPad専用のアプリです。（開発元：NPO法人スマイル・プラネット）



セミナー講師からのメッセージ

“ 子どもへの叱り方を工夫して！ ” ～封筒・手紙・シールでイメージする～



坂本千奈先生

この2つの手紙、どちらを開きたいですか？ 多くの方がハートを選ぶと思います。ここでたとえているのは、封筒は「叱り方・伝え方」、中の手紙は「伝えたいこと・内容」の部分です。定型発達の子どものくろくマークの封筒であっても先生から手渡されれば開けてメッセージを読もうとしますが、ASD傾向の子どもの場合は開封しないケースが多いように思います。子どもたちを叱らなければならない場面はたくさんあると思いますが、叱り方を工夫したいですね。どんなシールを封筒に貼って渡すかは、私たちの工夫次第です。中身を読んでもらえるような伝え方の工夫をして、信頼関係を構築できると、よい循環になっていくと思います。

“ 先生方の力量形成プログラムを ” 段階分けして考える！



大石幸二先生

- 個人の専門性があがっていくには段階があります。
- ▶ 材料を読み取り、支援の手立てを計画できるレベル
 - ▶ 材料がなくても、視点をもち子どもたちの活動を見取れるレベル
 - ▶ 相互作用が分析できるレベル
 - ▶ 授業を視点に基づいて構造化できるレベル

その材料の1つが学習輪郭表です。研修は年次や経験に応じて少しずつ積み上げる形がよいと思っているので、これを使われてみてはいかがでしょうか。



“ 支援の前後の ” 読み書き達成状況で議論を！



小池敏英先生

クラスワイドの支援を行っている学校で、支援を行う前と後の子どもたちの読み書きの達成状況を調べた表を作り、それを基に先生方が議論していくと、その先生が自分のやっているアプローチが、ある子どもにはうまくいった、またある子どもにはうまくいかなかったということが話の中で自然に出てきます。そういった達成状況表があれば、あとでコーディネーターの先生にも指摘していただけますし、こういう形の検証をしていくのがよいかと思いました。

今やっている支援は夢中で取り組んでいるけど、ただ取り組むだけではなくて、それがどう効果があったかを検証することで、うまくいっているところが見えてくる。また、うまくいっていないんじゃないかと、少しまだ足りないといったところも見えてくる。そういった研修の形もよいのではと思います。